町長室からこんにちは

No.89

一宮町長
馬淵 昌也

先日、東京都文京区で開かれた藩校サミットという会合に参加しました。これは、幕末から明治初期に、全国に200以上あったといわれる、当時の各藩で設けた教育機関であった、藩校の存在を再認識し、その歴史的役割をふまえて、今後の地域づくりに生かしてゆこう、という趣旨で開かれたもので、今年で20回目ということでした。

20年前、湯島の聖堂で地味に始まった会だったそうですが、今年は都知事も挨拶に見え、1，200人もの参加者がある、盛大な会となっていました。

わたくしは、一宮町長として、一宮藩の旧藩主家、加納家のご当主・加納久昭様とご一緒に参加しました。実は、一宮町にも藩校があり、一定の活動が記録されているところから、加納様からお誘いを頂き、始めて参加したものです。

一宮は、幕末になると、太平洋上に出没する黒船対策として、藩主の加納家が藩庁を一宮に置くようになりました。幕府の重臣として、それまで江戸詰めだった加納家家中の武士も、一宮に居住する者が次第に多くなったそうです。それを踏まえて、安政年間(1850年代)に当時の藩主・加納久徴侯が学問所を開き、武士や庶民の教育を始めたそうです。これが一宮の藩校のはじめです。明治2年(1869)に、最後の藩主加納久宜侯が、これをもとに崇文館(すうぶんかん)という藩校を正式に発足させ、教育課程を整備されました。明治4年(1871)に廃藩置県が行われると、崇文館は廃止され、その蔵書などは当時の木更津県に送られたそうです。

実は、現在の一宮小学校は、その崇文館の後身なのです。藩校が廃止されたのち、その施設を用いて一宮小学校が設けられるに至ったのです。

先日、一宮小学校は、創立150周年をお祝いしましたが、実は小学校が始まる前、十数年間にわたる藩校としての歴史があって、その基礎の上に新たな公教育の機関として発足したものなのです。

こうした歴史的背景は、江戸時代に藩の政庁が置かれた、当時の政治・経済・文化の中心地のひとつであった一宮だからこそ存在するものです。

また、一宮小学校には、城山を穿ったトンネルがあり、崇文門と名づけられています。これを通りながら、みなさまがこうした一宮町ならではの歴史に思いを馳せて頂けると幸いです。